

親になる喜び 苦勞に思いはせ

多可町中区東山の多可高校で、2年生34人が0～2歳の乳幼児とその保護者らから育児について学んだ。新型コロナウイルス禍による休止を経て、7年ぶりの開催。生徒は乳幼児を抱っこしたり、一緒に遊んだりして、子育てについて理解を深めた。
(金井恒幸)

周囲の支えの大切さ認識

同町子育てふれあいセンターや同町社会福祉協議会が協力し、0～2歳の乳幼児とその保護者12組が参加した。思春期の生徒たちが妊娠や出産、子育ての経験談などを聞いて将来を考える機会にするほか、育児はパートナーや家族の支えが不可欠であることを認識してもらおうと開かれた。

育児についての講演を聞いた後、生徒たちは4グループに分かれ、体験会に臨んだ。胎児を想定した重りを入れたバッグを使う「妊婦体験」や、妊娠1カ月以降の胎児の成長と母親の体の変化を人形などで紹介するコーナーがあり、生徒らは熱心に講師から説明を受けた。

また、赤ちゃん人形を使って抱っこの仕方を練習。

多可高2年生、子育て学ぶ授業



赤ちゃんに触れ合う生徒たち＝いずれも多可高校



胎児の重さなどを体験するグッズ

実際に赤ちゃんを抱っこすると、最初は心配そうな様子だったが、次第に慣れて楽しそうな表情になる生徒もいた。

その後、生徒は保護者に妊娠や出産、子育て中の苦勞や喜びなどについて質問。妊娠中の苦勞では「体重管理が難しかった」、育児中は「逃げ回るのでお風呂に入れるのがひと苦勞」などの回答があった。

長谷川りりさん(16)は「今回の体験で、一生懸命育ててくれた親への感謝があらためて増した」と振り返り、「子育てをする場合はパートナーとしっかり協力し、自分だけが負担を背負うことがないようにしたい」と話していた。